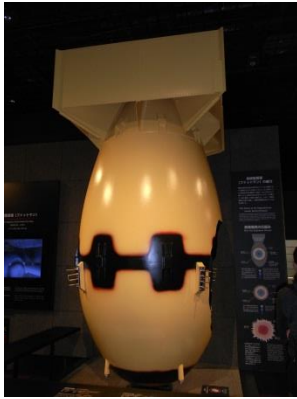


水道ジャーナリスト 有村源介の

源流 本流 汽水城

NO. 16 『死の同心円』長崎被爆医師の記録との出会い



写真①



写真②



写真③

写真① 長崎に投下されたファットマンの模型（原爆資料館展示）

写真② 水を求める被爆した人たちの遺体で埋まった「下の川」（平和公園）

写真③ 浦上天主堂遺壁（平和公園爆心地）

共に被爆地である広島と長崎の違いが、ずっと気になっていた。違いを認識していたということではなく、なぜ、長崎は広島程のインパクトをもって迫ってこないのか、という疑問である。己の不勉強や鈍感さは認めるものの、それだけでは納得できないものがある。広島は「広島市」という地名（漢字）から「ヒロシマ」という記号に置き換えられることによって、多くの意味性が付与されてきた。「ナガサキ」という記号は、ほぼ、目にしたことがない。その点、広島市と原爆被害の実態を、どこまで認識していたかの程度は兎に角、「ヒロシマ」について、学生時代だった1960年代に訪問したり、アラン・レネ監督作品「24時間の情事」（後、「ヒロシマ我が愛」）を鑑賞したりと、意識の中で細々としたつながりはあった。広島市が最初の原爆被災地という特別な存在であることから、長崎市に比べて大きく取り上げられるし、何よりも戦後の反原爆平和運動の中心となってきた。それにしても、認識する側の、長崎と広島の違いの大きさが意味するものは何だろうか。「広島は怒りのヒロシマで、長崎は祈りの長崎だ」という“常識”というか、あたかもスタンダードのごときものは本当か？毎年8月9日の様子を伝えるマスコミの、「この日、長崎は終日、静かな祈りに包まれた」という決まり文句に対して、私は非情な不快感をもっていた。

しかし、情けないことに、それを深く考えることもなく、私が最初に長崎に触れることができたのは、長崎市水道事業の取材だった。長崎大水害（1982年）の後で、水害の凄まじさと共に、水道事業者が市内に小規模ながら自らダムを開発し、あれこれと水運用を工夫して水需要に対応していることが印象深かった。東京都水道局以外、単独でダムを持つ

ことができるとは知らなかったのだ。水源ダムは、水道事業者が県や国にお願いして、「水を分けて頂く施設」だとばかり思っていた。この時代は、水道を始めとした水事業が面白く、原爆資料館や爆心地を訪問するなど、思いもよらなかった。その程度の認識だったのである。2006年（平成18年）、全国水道研究発表会で訪れた時は、その面白さに加えて、翌年の水道業界紙退職を考えていたので、なおさら意識は「長崎」から離れていた。

今回、長崎大学の藤岡貴浩准教授インタビューのため訪問するに際して、必ず訪問したいと考えていた場所は、長崎原爆資料館及び平和公園、浦上天主堂など、爆心地及びその周辺地区だった。どのような形で被爆が記録されているかということを知りたかったのだ。

浦上の地は凄惨極まりない被爆体験だけではない、苛烈な歴史を持っている。徳川幕府だけでなく、明治政府によっても強烈なキリシタン弾圧があったこと（長崎四番崩れ）、非差別部落の被爆者はさらに強い差別にさらされたこと（NHK・E TV特集）、朝鮮半島からの強制労働・移住者らの被爆実態は明らかにされていないこと（原爆資料館展示）——等々、いずれも「祈り」では済まされない強烈な告発と怒りがあった。

そして、資料館の多くの関係図書の中で、秋月辰一郎著『死の同心円』（長崎文献社）に巡り合った。同氏は京都大学医学部を卒業した後、浦上第一病院の医長を務め、同病院で勤務中に原爆が投下された。倒壊を免れた同病院で、多くの被爆者の治療に当たった。被爆者医療と同時に、「長崎の証言の会」会長を務め、被爆体験、被災資料の収集に努めた（同・プロフィール紹介より）。吉川英治文化社会賞、読売新聞医療功労賞、朝日賞などを受賞した。『死の同心円』は1972年、講談社から刊行され、2010年、「長崎名著復刻シリーズ002」として長崎文献社から初版が復刊された。

イラク戦争の時、イラクに侵攻したアメリカ軍が、イラク兵士を生き埋めにしたことについて、アメリカ国防省幹部が、「戦争での殺し方に残虐な殺し方とそうでない殺し方があるとは考えていない」と発言していたが、この著書によって、あるいは原爆資料館の展示によって、核兵器は全く別のものであることがよく分かる。もちろん、生き埋めの方がマシ、と言っているのではない。被爆による残虐さは、まったく、次元の異なったものである。

著書の中で、後日、治療活動に協力してくれた若者に思い出話と共に感謝を述べると、「先生はいつも怒ってばかりいた」とはぐらかすのである、というくだりがある。はぐらかしているのではなく、事実だったのであろう。そして、1949年の天皇の長崎行幸に対して、「長崎全市は興奮にわき立った。（略）私はそれを聞いて悲しかった。寂然としなかった。」と吐露している。

「長崎の人たちは原爆の惨禍が縁となって、平和と文化国家建設を唱えられる天皇陛下をおむかえできたことを歓喜したのである。これがポイントとなって「怒りの広島」にたいして「祈りの長崎」が強調されるようになった。」と嘆き、「カトリックの精神は偉大だが、それがいつとなく戦争の残虐や弾圧にたいする怒りとすりかえられていったのである。」と喝破している。

そして、その「怒りの秋月氏」（と言って良いものかどうか）が、浄土真宗からカトリッ

クに転宗するのである。「転宗をしてもしないもおなじことだという考えが広がってきた。(略) 仏教とカトリック、読経と聖歌の区別さえ感じなくなった」と、淡々と記述している。

最後に、とってつけたような水の話になるが、被爆直後の人も時間を経過して放射能症で死に行く人も、灼熱の中で（おそらく、体の中も灼熱になるのだろう）、水を求めて死んでいく描写が延々と続く。

少年時代、長崎で被爆した経験を持つ水道界の先輩と、かつて知遇を得たことがある。我が国を代表する技術者として長く活躍され、今は静かな余生を送られている。被爆直後、全身を焼かれながら洞窟に避難した。そこは天井からの水滴がとめどなく落下し、体を冷やしてくれたと聞いた。